

## 当科における扁桃周囲膿瘍の抗菌薬治療に対する検討

佐藤 哲也      松田 雄大      中村 健大      壺坂 俊仁  
永藤 裕      小柏 靖直      山内 宏一      唐帆 健浩  
守田 雅弘      武井 泰彦      甲能 直幸  
杏林大学 耳鼻咽喉科・頭頸科

扁桃周囲膿瘍は急性扁桃炎から続発する扁桃周囲間隙に膿汁が限局して貯留した状態であり、日常の一般臨床でよく遭遇する疾患の1つである。治療は穿刺・切開などの外科的治療と、抗菌薬投与を組み合わせで行われる。治療が適切に行われないと、膿瘍が副咽頭間隙に波及し、さらに下方へ進展すると縦隔炎、縦隔膿瘍、敗血症を併発し、場合によっては致死的な転帰を辿り得る疾患である。

細菌培養検査の結果が判明するまでの間、抗菌薬は扁桃周囲膿瘍の起炎菌として多く報告されている連鎖球菌や嫌気性菌に抗菌活性を有するものが選択される。ペニシリン系や第三世代セフェム系にリンコマイシン系を併用する方法の他、現在ではカルバペネム系抗菌薬も臨床で広く用いられている。

今回我々は2006年1月から2010年6月までのほぼ4年半の間に当科にて入院加療を行なった扁桃周囲膿瘍190例を対象とし、診療録に基づき後方的調査を行い、年齢、性別、既往、穿刺・切開の有無、使用した抗菌薬、入院期間などの臨床的検討を行った。特に抗菌薬を中心に検討し、カルバペネム系抗菌薬であるメロペネム水和物とその他の抗菌薬とで比較検討を行った。